

## 始 ま り



牛 島 義 友

歴史や教育の中に始まりを意識することはその終りを同時に考えることである。終りは消滅ではなく目的(end)である。目的実現のために努力することが教育であり、人生であり、歴史であるということになる。

幼児教育も教育目標をはっきり意識して計画的に指導することであり、教育の始めを自覚することはこの目的と計画性を強調することにもつながろう。

教師の生活を長く続けていると、新学年といっても事始めの意識が薄らいできて、マナーリズム化する危険がある。子どもにとっては、新入園ということは人生における最初のただ一回きりの出来ごとであり、ここで教師や友人たちと出会うことはその後の性格形成に大きな影響を与えている。だから教師もまたこの際に事始めの意識を持つこ

とが大切である。

しかしこの目的をはっきり持った計画的な指導は、いつものまにか、教師が子どもの人間を形成するものである、という考えになる危険もある。ものを作る場合には、これによろしい。製品の構造や機能をはっきり樹て、設計図にしたがって製作し、たえず製作過程や製品の管理をしながら作ることによってよいものが出来てくる。しかし人間をこのような態度で形成すると考えたら、大変な誤りである。始めと終りとを自分の手の中に持つこと、アルファでありオメガであるのは神の御業であって、人間ができると思ふことは僭越な冒瀆行為である。物を作る場合でも人間の科学技術は不完全である。一つの目的には有効な物であっても全体のバランスを失うことによって、公害や副作用のた

めに生態系を乱すことになる。教育公害だとてルソー以来たえず警告されていることである。

このように事の始めと終りを自分の手中に納めるといふ態度ではなく、教育の終りはまた次の始まりである。(continuation)と考えることが大切ではなからうか。

人間や歴史はたえず生々流転しており、一つの目的地に着いた時にはすでに新しい発展が始まろうとしているし、個々の教師の課せられた仕事はこの一つのコースを安全に降ると共に、その間にさまざまな新たな経験を加えて豊かな生活体験をなし、次の活動の源泉を貯えるように導くことである。教師は船頭の役をするかもしれないが、生命の流れの増大は別の力によって行われている。

また教育の始まりも実は前の成長を受けているものに他ならない。新人園児が人生のスタートラインにあり、白紙の姿であると思うのは大きな間違いであって、この子はすでに先生のいうことが、理解できる程度に言語能力が発達したものであるし、その社会性や性格もある程度個性化しているものである。教育は学校教師から始められる、

と思うことは間違いであり、母親たちによる家庭教育を受けつぐものである。家庭に任せておくと伸びる才能が放置されたり、生活態度の基礎が不十分であるので、できるだけ早く教育を開始しようとする考え―実は今日このような意味での幼児才能教育や零歳児教育論が氾濫しているが―これは家庭教育を無視した学校教育偏重論である。幼児教育は家庭教育の上に加えられるものであるし、またその終りは新たな教育の開始につながるものである。

この人生の教育にたずさわる者は個々の学校の教師のみでなく、家族、友人、社会の人々、であるし、何よりも自分自身の自覚的努力によって形成して行く子ども、否人間自身である。しかもこれらのさまざまな教育活動や教育的要素の中に統一的なものをみとめるならば、それは文部省でも政治でもなく、さらにそれよりも次元の高いもの、これによって人類の、否、世界の存在の意義が説き明かされるようなものである。